

古今著聞集云く

白河院しらかはのみんみゆき深雪のあした、雪見の行幸あるべし、とく御供の人少々めさる事ほのきこえし程に。やがて

出御有て、面白き雪かな何かたへかむかふべき、小野をのの皇太后宮くわうたいこうくうのもとへむかは、やと抑られけるを。御隨身承りて従者を馬にのせて、彼宮へはせまるらせて、かゝる事侍り、すでに御車奉りて候なり、御用意候べしと申したりければ、紅のきぬ五具ありけるをせはりにふつときりて、寢殿十間になんわたされたりけり。みづからいりて御らんずる事もあらばいかゞと申人有りければ。皇太后宮くわうたいこうくう、雪見る人は内へいる事なしとて、さわぎたるみけしきなくてなんおはしましける。やがて御幸なりて、御車やりて入てはしがくしのまにさしよせておはしましければ、みきをなんすゝめ奉られける。朽葉のかさみきたる童二人、一人は沈のおしきに玉のさかづき、銀のさらに金の立花一ふさおかれたるを持たりけり、一人は片口の銚子に酒をいれて持ちたり、二人の童寢殿のまへをへて、はしのこをなゝめにおりくだりて、御車へ参りけるさまいみじく優になんみえ侍る。酒はうるはしうならせ給ふなる、橘は季すき通御供みちおんどもになん侍りけるに給はせけり。上皇かへらせおはしましけるまゝに、ゆかしくなつかしき世にておはしましけれとて、庄しやういつしよ一所まるらせられたりければ、只今御幸なるよしつげまるらせたりける御隨身になんあづけ給ひける。

(卷十四)

梶取社かちとりやしろ 〔二瀬せの北のかた、木船きふねの一鳥居のかたはらにあり。祭る所神秘にして木船きふねのやしろに属す

足酒石あしすゞいし 〔梶取かちとりの北、橋の上河の中にあり。伝に云ふ、むかし宇治うちの橋姫はしひめはじめ一念の嫉を懐ふて、誓て木船きふねの社に

日参す、其時こゝにて足を洒ぎしといふ〕

螢石ほたるいし 〔右の石の西山腹にあり。伝云、和泉式部いづみしきぶ木船社きふねに詣するとき、此所に螢の飛を見て歌を詠ず、故に名づくる

とぞ〕

木船河山下影の夕暮に玉散る波は螢なりけり

和泉式部

帰一法眼塚きいちほげんつか 〔梶取社かちとりやしろの北半町ばかり東の方にあり。是則源みなもと牛若丸鞍馬うしわかまるくらまに住居のとき、兵術の師なりといふ〕

龍王瀧りうわうのたき 〔木船社きふねの北一町ばかりにあり、西よりひがしに落る、雨を乞には此瀧に來つて祈る事旧例なりとぞ〕